

## 4. アンケート結果から見る 茨城県におけるAiの現状と展望

田代 和也\*1,10 / 小林 智哉\*1,10 / 安達 義輝\*2,10 / 飯泉 均\*3,10  
小沼 徹哉\*4,10 / 櫻井 常男\*5,10 / 椎名 文哉\*6,10 / 染谷 聡香\*1,10  
高野 秀喜\*7,10 / 田所 俊介\*8,10 / 藤田 法久\*9,10

\*1 筑波メディカルセンター病院放射線技術科 \*2 茨城県西部メディカルセンター放射線科  
\*3 東京医科大学茨城医療センター放射線部 \*4 小山記念病院画像検査科 \*5 土浦協同病院放射線部  
\*6 ひたちなか総合病院放射線技術科 \*7 水戸済生会病院放射線技術科 \*8 日立総合病院放射線技術科  
\*9 龍ヶ崎済生会病院放射線技術科 \*10 茨城Ai研究会

近年の死因究明におけるオートプシー・イメージング(以下、Ai)の重要性が増している中、費用拠出など解決すべき問題はまだまだ多い。そこで、茨城県内におけるAiの施行状況を調査した。なお、2016年の新潟県での調査<sup>1)</sup>と内容を比較するため、アンケートの設問はそれを参考に作成した。

### 対象と方法

「月刊新医療」(2015年10月号)に掲載された、2015年8月現在CTを保有している茨城県内全221施設<sup>2)</sup>を対象として、以下のいずれかの方法で調査を行った。

- ① 茨城Ai研究会の世話人の知人が在籍する施設
  - a) 茨城Ai研究会のホームページ上のWebアンケートに回答
- ② 茨城Ai研究会の世話人の知人が在籍しない施設は、電話でAiの経験の有無を確認の上、
  - b) Aiの経験がある施設には調査票(図1)を送付し、回答後返送
  - c) Aiの経験がない施設には、電話で確認し、終了

なお、Webアンケートと調査票の設問内容は同じである。

回答期間は2018年7月1日～9月30日の3か月間とした。

調査時には、茨城県内に1台のみ遺体専用のCT装置があった。

### 結果

統合または閉業した3施設を除いた218施設のうち、217施設(99.5%)から回答を得た。そのうち、33.6%に当たる73施設でAiの経験があり、そのアン

ケートの回答者は、診療放射線技師68、放射線科医2、その他の医師3、事務職1、その他(助手)1であった(複数回答可)。回答結果を図2～22に示す。

自由意見として、「昨年、解剖を希望されないご家族が多いため、Aiを行うことで死因究明に大きな役割を担っていると考える」「Aiについて読影補助講習会を行ってほしい」「Ai撮影料金の相場がわからない」「Ai認定診療放射線技師の必要性について、もっとアピールして行ってほしい」「画像だけでの診断には限界を感じており、医師でもAi画像は見慣れていないので、診療放射線技師の読影補助が重要だと感じている」「医師が死因を究明するために必要と考え、指示を出す以上、Aiも診療放射線技師の仕事だと思っている」「警察や各施設・部署でAiについての考えはさまざまであり、茨城県全体で一本化できると体制が整えやすいと思う」との意見があった。

### 考察

2016年の新潟県での調査は、対象が診療所・検診施設などを除く新潟県診療放射線技師会員が所属する100施設であり、茨城県での調査と対象が異なるため単純な比較はできないが、回答結果はどの設問においても新潟県と同様の傾向があった。